教材開発・龍門造像記原拓研究（一）

岡村　浩・利光亜希子

序

小・中・高と積み重ねる書写書道教育だが、小・中のそれは国語科に「書写」として位置付けられ、一方高等学校では芸術科「書道」として単独に成立する。国語科と芸術科と、双方には相当学習内容に開きがあって、指導者側に余程入念な融合性への配慮がなければ互いが別個のものとなってしまい、全体を通した学習効果は稀薄になろう。

さて、中学校書写一年次の学習内容をみると、小学校との大きな相違点に「行書の学習」が登場する。図一に学校図書（平成十九年二月発行）の概当頁（P30）を掲示する。

この右頁の左上部をとくに注視する。白黒反転した文字である。初見では違和感があって当然のものだが、高等学校書道の教科書ではこの白黒反転した文字、「拓本」が手本の主役に置かれるようになる。

専門用語で「拓本」と称す白黒反転した文字は、たいてい史上の先人の古い筆蹟中から手習いの対象と認められるものを石面に刻し、上からしめらせた紙を張り、柔らかな布に墨を付けたもので叩く。すると石面上えぐられた部分が白く浮かび上り、かような白黒反転した文字が表出する次第である。

多くは長い間自然の雨風にさらされて、風化が続いた傷みの顕著な文字ばかりで、果たして高校生にとってこれらが能書として優れた内容に映るか、よく検討しなければならない面は確かにある。

ただ、手本を左から右へ行儀よく写すことを大きな目標とせず、「個」つまり書き手の心情の発露を最終的な学書目標とする芸術活動にあっては、ひと癖あってかたよった価値観の塊の如くみえる先人の拓本文字が、創作活動への大いなるヒントを与える、有力な資料・テキストとして活用される面が出てくる。

同じ白黒反転の文字でも、粗末な印刷物でみるよりも高級なコロタイプ印刷によって、そして最上なのが印刷物ではなく、「原拓」でみることを希求したいものである。

原石に触れた、本物の息吹を含有する「原拓」は市場価値が高く、けっして入手は容易でない。また、同じ古典の原拓でも、採拓時期が古い方が文字の摩滅も少なく、原拓としての価値は高くなる。古拓・旧拓が尊ばれるのは当然のことである。

他方、好事家の注目の的となったり手習いの対象として人気の高い古典に関しては、往々にして飜刻・復刻・偽刻等が別に作成されている。拓本の新・旧さらに真贋を検討することも、重要な研究分野として今日まで成立し、多くの有益な研究成果が発表されてきた。

新潟大学には比較的多くの原拓本が所蔵され、就中「麓山寺碑」宋拓本が旧拓として知られる。ただ残念なのは、この唐代・李北海の書が現代に

二〇〇七・七・二　受理

中心
高さはつめて
横幅を広く
中心に小さく
つくりはへんより大きく
へんはやや小さく縦長
中国の人、王羲之（三〇七？～三六五？）の『集王聖教序』から集字。
点画が連続したり、省略されたりする部分に気をつけよう。
楷書との比較
（かご字が楷書）
丸み
連続
省略
短い
2画の連続
3画の連続
●印では穂先を押さえ直して書く。
30

図一

あって顧みられることが少なく、史上の脇役に位置している点である。

本稿に取り上げる「龍門造像記」は、高等学校「書道」Ⅰの教科書中、殆どの出版社のものに掲載され、いわば必修の楷書古典といってよい普遍的書美を帯同する。力強い方筆の学書は、中学校までの書写内容にはない新鮮な学習目標である。

ところで、「龍門造像記」程の人気を博す刻石に関しては、御多分にもれず真贋の見極めの困難な拓本が非常に多く世上に伝わり、精巧な出来ばえのものが、しかも何作も中国各方面で制作されている。

大学所蔵の分は二十品を収載。一帙二冊本。本の題簽は中国人の書き手によるものと推察される。彼の地で剪装仕立てになった冊子とみてよい。

二十品の状態は一括に採拓されたものではなく、別々にあったものを一種の集帖にした性格を有し、「龍門造像記」原拓にあっては間々みられることである。

私はこの原拓を実技制作の授業で紹介し、或いは鑑賞指導上の学書材料として日頃活用してきた。正直にいってこれら二十品の間には、精粗の質のみならず、真贋といった重い問題をもつものといわざるを得ない。しかしたとえ贋作であったとしても、それを見分ける過程も先述のように重要な研究分野として存在し、生きた学問であることに間違いはない。そこで、この数年の間、大学院授業においてしばしば本拓本を教材として、質の分析を丁寧に進めてきた。日頃の授業から生じた教育研究成果の一端としてまとめたものである。

新潟大学蔵龍門二十品拓本の検証

―牛橛造像記・楊大眼造像記―

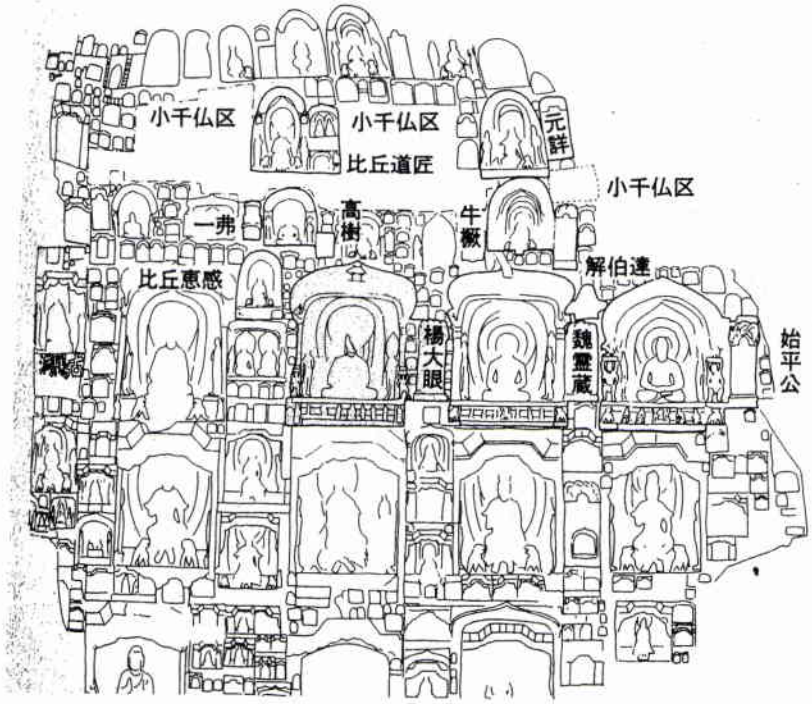
○牛橛造像記

一、概要

北魏の洛陽遷都後二年、太和十九年（四九五）に刻され、正式には「長楽王丘穆陵亮夫人尉遲為牛橛造像記」という。龍門十品の一つで、有紀年造像記中最古のものである。造像記の高さは100㎝で、幅は34㎝である。碑文は一行目の三文字目が欠けているが、それを史料で補うと太和十九年となる。

河南省洛陽龍門山の古陽洞北壁、魏霊蔵造像記の上方に位置し（図二）、交脚の弥勒菩薩と共に刻まれている。碑文の内容は、長楽王丘穆陵亮夫人の尉遲氏が亡き息子牛橛の冥福を祈り、この像を造ったというものである。

丘穆陵氏は、古くから北魏宗室に仕えた胡族の功臣の一人である。亮は名で長楽王になった人である。



図二　古陽洞北壁

この造像記の書風は、方正厳整である。また横画、縦画などの起筆、収筆がはっきりしており、造像書風の先駆をなしているばかりでなく、一種の標準形を呈している。

康有為は『広芸舟雙楫』で「長楽王（牛橛造像記）、広川王（太妃侯造像記）、大妃侯、高樹は端方峻整」また、「体方筆厚にして、画平らかにして竪直。よろしく先ずこれを学ぶべし」と評している。

二、増補校碑随筆訓読

増補

長楽王丘穆陵亮夫人尉遲造像

太和□九年十二月、正書、七行、行十六字。

乾嘉拓本、二行「牛橛」之「橛」字完好、稍晩僅損末二筆。近拓「橛」字石泐痕已連及首行「公」字。五行「若有」之「若」字、稍舊拓本「口」部未損、新拓則泐成一白塊。

有重刻本、三行首「鏤」字、原石稍有模糊、重刻本竟空一格、一筆不刻。首行第三字原石泐、重刻本空一格也一筆不刻。

影印本

有正書局有石印《龍門廿品》。

日本二玄社《書跡名品叢刊》輯入膠印。

日本《書苑》龍門造像専號。

藝苑眞賞社珂羅版印《龍門造像廿品》。

〈語句説明〉

・模糊・・ぼんやりしている、あいまいである

・首・・・最初、一番初め

・格・・・段、行、字

・膠印（こういん）＝胶印・・ゴム印刷のこと

・乾・・・乾隆年間（一七一一～一七九九）

・嘉・・・嘉慶年間（一七九六～一八二〇）

・有正書局・・・中国の出版社

・珂羅版印・・・オフセット印刷

⇔

コロタイプ

※コロタイプの方がオフセット印刷より上質である。

〈書き下し文〉

太和□九年十二月。正書。七行。行ごとに十六字。

乾嘉の拓本、二行「牛橛」の「橛」字完好なり。やや晩のもの僅かに末二筆を損す。近拓「橛」字の石泐の痕は已に連なりて首行「公」字に及ぶ。五行の「若有」の「若」字、やや旧拓本は「口」部、未だ損せず。新拓はすなわち泐し一白塊を成す。

重刻本有り、三行の首「鏤」字、原石はやや摸糊あり。重刻本はついに一格を空け、一筆も刻さず。首行の第三字は原石泐す。重刻本は一格を空け、また一筆も刻さず。

影印本

有正書局石印有り「龍門二十品」

日本二玄社「書跡名品叢刊」集入膠印

日本「書苑」龍門造像専号

芸苑真賞社珂羅版印「龍門造像二十品」

〈大意〉

太和□年十二月、楷書、七行、一行十六字。

乾隆、嘉慶年間の拓本は二行目「牛橛」の「橛」の字が完全である。やや末期に近いものは、わずかに最後の二画が摩滅している。近拓では「橛」の字は石が摩滅した後が既に一行目の「公」の字とつながっている。五行目の「若有」の「若」の字は、やや旧拓本では「口」の部分が摩滅していないが、新拓では摩滅し白い塊ができている。

重刻本がある。重刻本は三行一字目の「鏤」の字が、原石はややあいまいであるのに対し、重刻本では一マス全て空白で一筆も刻されていない。一行三字目は原石がなくなっているところ、重刻本は一マス空白であり、

一筆も刻されていない。

三、善本碑帖録訓読

魏牛橛造像記

正書、七行、行十六字。

魏太和□九年十一月。

石刻在河南洛阳龍門山。

乾、嘉拓本第二行牛橛、橛字末二笔无石花、完好。稍旧拓橛字末笔全損泐、近拓橛字右石花連及首行公字。

〈語句説明〉

・泐・・・石が裂ける

・石花・・石の上に咲いた花　石傷

〈書き下し文〉

正書、七行、行ごとに十六字。

魏の太和□九年十一月。

石刻は河南の洛陽、龍門山に在り。

乾、嘉拓本の第二行の牛橛、橛字の末二筆は石花无く、完好なり。やや旧拓は橛字の末筆全て損泐す。近拓は橛字の右の石花、連なりて首行の公字に及ぶ。

〈大意〉

楷書、七行、一行十六字。

魏太和□九年十一月。

石刻は河南洛陽龍門山に有る。

乾隆年間、嘉慶年間の拓本は二行目「牛橛」の「橛」字の最後二筆に石花が無く、完全である。やや旧拓は「橛」字の末筆が全て摩滅している。近拓は「橛」字の右の石花が一行目の「公」字に繋がっている。

四、考察

増補校碑随筆（二）、善本碑帖録（三）の記述をまとめると次のようになる。

・乾隆・嘉慶年間の拓→二行目「橛」字に石花がなく完全である（増補校碑随筆）（善本碑帖録）。

・乾隆・嘉慶年間終わりの拓→二行目「橛」字の最後の二画が摩滅している（増補校碑随筆）。

・やや旧拓本→二行目「橛」字の最終画が全て摩滅している。五行目「若」字の「口」が摩滅していない（増補校碑随筆）（善本碑帖録）。

・近拓→二行目「橛」字の摩滅の後が一行目の「公」字に及んでいる（増補校碑随筆）（善本碑帖録）。

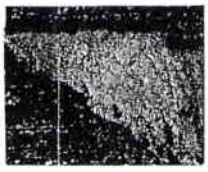
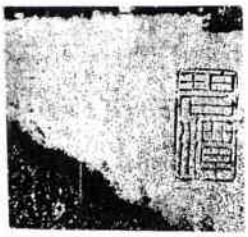
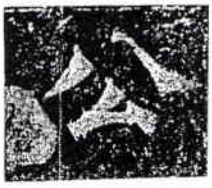
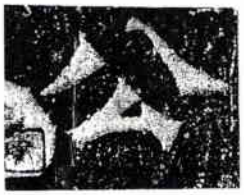
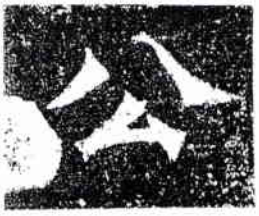
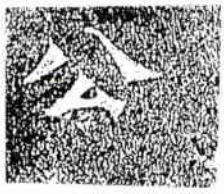
・新拓→五行目「若」字の「口」部分が摩滅し、一白塊がある（増補校碑随筆）。

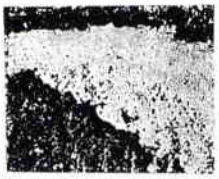
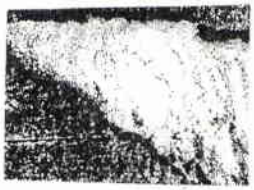
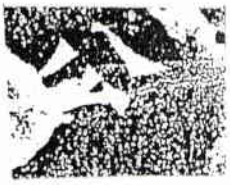
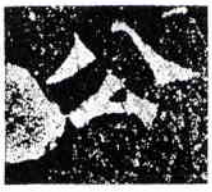
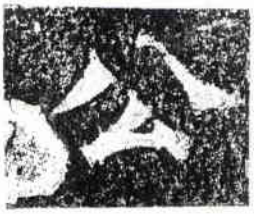
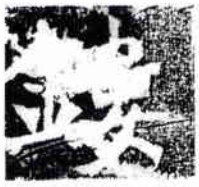
・重刻本→一行目三字目が一マス空白で刻されていない。三行目「鏤」字が空白で刻されていない（増補校碑随筆）。

これらの記述をもとに比較表の①から⑧（①北京最旧拓本②清雅堂一九四二③清雅堂一九七九④書跡名品叢刊⑤中国法書選⑥書品一七号⑦一九九五年椎拓本）の拓本を考察していく。

乾隆・嘉慶年間に採拓されたと考えられるのは①北京最旧拓である。理由は二行目「橛」字に石花が無く、欠損している部分がないからである。②清雅堂一九四二③清雅堂一九七九年刊本は、二行目「橛」字の最後二画が欠損している。そのため乾隆・嘉慶年間終わり頃の拓と考えられる。④書跡名品叢刊⑤中国法書選は、二行目「橛」字の最後の二筆が全て欠損している。五行目「若」字の「口」部分はやや摩滅がみられるものの⑥⑦と比べると小さいため、やや旧拓本だと推察される。⑥書品一七号は二行目「橛」字の摩滅が「羊」部分まで及び、石花が②③④⑤に比べて大きくなっており、一行目「公」字に近付いている。さらに五行目「若」字の「口」の右下部分の摩滅が大きくなっている。これらのことから近拓と考えられる。⑦一九九五年椎拓本は、比較表から一目瞭然であるがどの字も摩滅が

図三　牛橛造像記比較表

④ 書跡名品叢刊 1959年 二玄社 田近憲三 近藤秋篁蔵本	③ 清雅堂 1979年 江川碧潭蔵本	② 清雅堂 1942年 記載なし	① 龍門二十品 1995年 中教出版 北京最旧拓本	拓本の概要
				一行目「十」
				一行目「公」
				二行目「橛」
				三行目「鏤」
				五行目「若」

⑧ 新潟大学蔵拓本	⑦ 龍門二十品 1995年 中教出版 1995年椎拓本	⑥ 書品17号 1951年 東洋書道協会 記載なし	⑤ 中国法書選 1988年 二玄社 個人蔵
			
			
			

ひどくすすんでいる。二行目「橛」字の石花は一行目「公」字の三画から四画目に及び、五行目「若」字の「口」部分は中が全て摩滅している。また⑥と比較すると二行目「橛」字の摩滅もすすんでいる。よって新拓である。

五、結

これらのことをふまえて⑧新潟大学所蔵拓を検証する。比較表で窺い、二行目「橛」字の石花が一行目「公」字にどれぐらい及んでいるかをみると、その大きさは⑥と⑦の間といえる。二行目「橛」字の摩滅具合はつくりの部分がみえない。また「橛」字の上、左に①から⑦までにはみられない摩滅がみられる。それに加えて三行目の「鏤」字は、金へんが①から⑦のものと形が異なる。五行目「若」字の「口」部分は摩滅し、「口」の中をみることができない。これは一見、新拓の条件に当てはまるものであるが、字形を①から⑦と比較すると、三画目の横画及び右上がりの角度が異なる。比較表ではとりあげなかったが、他の文字をみると、①から⑦のものと筆勢が異なっていた。新潟大学蔵拓は摩滅など細かいところまで再現しているが、総じて翻刻であると考える。

○楊大眼造像記

一、概要

北壁・上中下段三段中の上段、入り口より三番目、魏霊蔵造像記の左側にある（図二）。造像記の高さは126㎝、幅は42㎝ある。内容は前段が楊大眼を讃えたものとなっている。題額に「邑子像」とある。所謂、龍門四品の一つである。

楊大眼は北魏の武人で『魏書』列伝六一、『北史』『南斉書』に関連する記載がある。それらによれば、彼は人並み以上の驚異的な跳走力をもち、勇敢で、一世を風靡した。明帝の時に荊州指史・平東将軍になり在任のまま亡くなったという。

この刻石は文意から、彼が南蠻の掃蕩から帰還した景明元年（五〇三）頃のものだとみられている。造像記中に「先皇の明蹤を覧」（孝文帝が楊大眼の英才を見抜く力をもっている）、「盛聖の麗跡を観て」（孝文帝が洛陽に遷都し、統一の偉業を完成したことを讃える）という文章があることから、この造像記は孝文帝の高徳をあわせて賞賛するためにつくられたものと考えられる。

書・刻とも優れており、康有為は『広芸舟雙揖』で「始平公、魏霊蔵とともに雄強原密」、「隷書の意を遺憾なく極め、歴然たり」と評している。

二、増補校碑随筆訓読

【楊大眼造像記】正書十一行、行二十三字。有額、正書、陰文三字。在河南洛陽。

舊拓本第五行踵應等字、第六行垂字光字完好、又也摧二字間、僅泐連也下摧上筆道。第十行刊名二字可辨。今則垂字漫漶、光字末筆損、也摧二字泐更甚、踵字只存右下角之少許矣。若踵字下尚存大半、與刊字辨者、為稍舊拓本。

増補

楊大眼造像記

乾隆拓：首行「孝文皇」之「文」字僅損捺筆之端。五行「遠」字末筆完好。十行「刊石」二字完好。稍晩拓「刊」字即損鈎筆。

嘉慶拓本：首行「文」字可見。二行「不遘」之「不」字完好。五行「龍曜」之「龍」字未泐。六行「也摧」二字完好。

道光拓本：首行「文」字泐盡、二行「不」字中泐。五行「龍」字右泐。六行「也摧」之「也」字下泐、「摧」字上泐。然五行「踵應」二字完好。十行「刊石」二字之「刊」字但損鈎筆、「石」字但損上横。

稍舊拓：首行「孝」字僅上微損。五行「踵應」二字之「踵」字泐上小半、「應」字泐「心」部。十行「刊」字泐左半、「石」字泐上半。

近拓：首行「孝」字泐盡。五行「踵」字泐大半。十行「刊石」二字泐盡。

影印本：

一、藝苑眞賞社珂橛版印《龍門造像廿品》。

二、日本二玄社《書跡名品叢刊》輯入、膠印。

三、日本《書苑》龍門造像専輯。
四、有正書局有石印《龍門廿品》。
五、北京文物出版社《龍門四品》輯入舊拓本。

〈語句説明〉
・正書・・楷書
・筆道・・筆づかい
・瓣・・・弁別する、見分ける
・少許・・少しばかり、わずか、少数
・捺・・・右払い、（漢字の筆画の一つ）右下へ斜めにはねる
・端・・・さき
・完好・・完全である
・鈎・・・はね、漢字のはねる筆法
・少半・・半分足らず、半分よりもやや少ない

〈書き下し文〉
正書十一行、行ごとに二十三字。額有り。正書。陰文三字。河南洛陽に在り。
舊拓本は第五行踵應等の字、第六行垂字光字、完好なり。又也摧二字の間は、僅かに泐し也の下摧の上に筆道連なる。第十行刊名の二字辨ずべし。今すなわち垂字漫漶、光字の末筆損し、也摧の二字は泐すこと更に甚だし、踵字只右下角の少許を存す。もし踵字の下尚大半を存し、刊字と辨ずべきものはやや舊拓本と為す。

増補
乾隆拓の首行「孝文皇」の「文」字、僅かに捺筆の端を損す。五行「遠」字の末筆は完好なり。十行の「刊石」の二字完好なり。やや晩拓は「刊」字すなわち鈎筆を損す。
嘉慶の拓本は首行「文」字見るべし。二行「不遘」の「不」字完好なり。五行「龍曜」の「龍」字は未だ泐さず。六行の「也摧」の二字、完好なり。
道光の拓本は首行の「文」字泐し尽くし、二行の「不」字中ば泐す。五行の「龍」字の右泐す。六行「也摧」の「也」字の下泐し、「摧」字の上泐す。しかれども五行の「踵應」の二字完好なり。十行の「刊石」二字の「刊」字ただ鈎筆を損し、「石」字ただ上横を損す。
やや舊拓は首行の「孝」字、僅かに上微損す。五行の「踵應」二字の「踵」字は上は小半を泐し、「應」字の「心」部泐す。十行の「刊」字の左半を泐し、「石」字の上半を泐す。
近拓、首行の「孝」字は泐し尽くす。五行「踵」字は大半泐す。十行「刊石」の二字は泐し尽くす。

〈大意〉
楷書十一行、一行二十三字。額、楷書、碑陰三字。河南洛陽にある。
旧拓本は五行目の「踵」「應」等、六行目の「垂」「光」は完全である。又、「也」「摧」の間は僅かに石が裂け、「也」の下と「摧」の上との筆づかいがつながっている。十行目の「刊」「名」の二字は見分けることができる。今は「垂」の字ははっきりせず、「光」の字は末筆が破損しており、「也」と「摧」の二字は摩滅が一層甚だしく、「踵」の字は只、右下角が少し残るだけである。もし、「踵」の字の下（の部分）がまだ大部分残っており、「刊」の字が見分けることができるならば、（それは）やや旧拓本である。

増補
楊大眼造像記
乾隆年間の拓の一行目「孝文皇」の「文」の字は、わずかに右払いの端が摩滅している。五行目の「遠」の字の末筆は、完全である。十行目の「刊石」の二字は、完全である。やや乾隆末期拓は、「刊」字のはねが摩滅している。
嘉慶年間の拓本の一行目「文」の字は見ることができる。
二行目「不遘（こう）」の「不」の字は、完全である。五行目「龍曜」の「龍」の字は、摩滅していない。六行目「也摧（さい）」の二字は、完全である。

道光年間の拓本の一行目「文」の字は摩滅し尽くしており、二行目「不」の字は少し欠けている。五行目「龍」の字は右側が摩滅している。六行目「也摧」の「也」の字の下部分は、摩滅している。「摧」の字は上部分が摩滅している。しかし、五行目の「踵應」の二字は完全である。十行目「刊石」の「刊」の字ははねが摩滅していて、「石」の字は上横が摩滅している。

やや旧拓本は一行目「孝」の字わずかに上が摩滅している。五行目「踵應」の「踵」の字は上の半分足らずが摩滅しており、「應」の字の「心」の部分がなくなっている。十行目「刊」の字は左半分が摩滅しており、「石」の字は上半分がなくなっている。

近拓は一行目「孝」の字が摩滅してなくなっている。五行目「踵」の字は大部分がなくなっている。十行目「刊石」の二字は摩滅してなくなっている。

三、善本碑帖録訓読

魏楊大眼造像記

正書、十一行、廿三字。額正書、一行三字。

无年月。刻石在洛阳龍門山老君洞。

見乾隆拓本、第一行〝為孝文皇〟等字可見、五行遠踵應三字完好。遠字末筆完好。十行刊石二字完好。

其次孝字完好、文字可見。踵應二字完好、刊字可見。稍旧道光拓孝字損、踵應二字存大半。比較近拓損泐字少。

此記新旧拓本比較民国前拓与民国后拓、字口与損泐　字相差很多、学者可求民国前拓本。因民国来学魏碑体人多、拓毀。

以上二種与始平公、孫秋生等、称龍門四品。字多較完整清晰、是正規魏碑体。

〈用語説明〉

・魏碑・・・北魏の石碑の文字

・毀・・・・壊す、破壊する

・較・・・・比較的

・字口・・・字肌

〈書き下し〉

正書、十一行、二十三字。額は正書、一行三字。

無年月。刻石は洛陽龍門山老君洞に在り。

乾隆拓を見るに、第一行の「孝文皇の為に」等の字は見るべし。五行の遠踵應の三字は完好なり。遠字の末筆は完好なり。十行の刊石の二字は完好なり。

その次、孝の字は完好、文字は見るべし。踵應の二字は完好、刊字は見るべし。ややふるき道光拓の孝字は損し、踵應の二字は大半損す。近拓と比較するに、字を損泐すること少なし。

この記の新旧拓本を比較するに民国前の拓と民国後の拓は、字口と損泐するの字相の差はなはだ多し。学ぶ者は民国前の拓本を求めるべし。ちなみに民国来、魏碑体を学ぶ人多く、拓し毀さる。

以上二種と始平公、孫秋生等を龍門四品と称す。字は多く較べるに完整清晰、これは正規の魏碑体なり。

〈大意〉

楷書、十一行、二十三字。題額楷書、一行三字。

年月なし。刻石は洛陽龍門山の老君洞にある。

乾隆年間の拓本を見ると、一行目「為孝文皇」等の字を読むことができ、五行目「遠踵應」の三字は完全で、しかも「遠」の字の末筆も完全、十行目「刊石」の二字も完全である。

その次の（拓は）「孝」の字が完全で文字をみることができる。「踵應」の二字も完全で、「刊」の字をみることができる。やや古い同光年間の拓は、「孝」の字が摩滅しており、「踵應」の二字は大半が残っており、近拓と比較すると摩滅している字が少ない。

この造像記の新旧の拓本を比較すると、中華民国以前の拓とそれ以後の拓では、字肌と摩滅した字の相違が大変多いため、学者は中華民国以前の

拓本を求めるべきである。なお、中華民国になってから、北魏の石碑の文字を学ぶ人が多くなり、それゆえに採拓によって石面が壊された。

以上、二種と始平公、孫秋生などを龍門四品といい、字が比較的多く完整清晰、正規の北魏の石碑の文字である。

四、考察

増補校碑随筆（二）、善本碑帖録（三）の記述をまとめると次のようになる。

・乾隆年間の拓→一行目「為孝文皇」、五行目「遠踵應」「遠」の最終筆、十行目「刊石」完全である（善本碑帖録）。

「文」字の右払いの端が摩滅、五行目「遠」最終筆、十行目「刊石」が完全である（増補校碑随筆）。

・乾隆年間晩期の拓→「刊」字のはねが摩滅している（増補校碑随筆）。

・嘉慶年間の拓→一行目「文」字はみることができる。二行目「不」字は完全である。五行目「龍」字は摩滅していない。六行目「也摧」も完全である（増補校碑随筆）。

・道光年間の拓→一行目「文」字、二行目「不」字のほとんど、五行目「龍」の右、六行目「也」の下部分、「摧」字の上部分が摩滅している。五行目の「踵應」の二字は完全である。十行目「刊」字のはね、「石」字は上横が摩滅している（増補校碑随筆）。

・やや古い道光年間の拓→一行目「孝」字が摩滅しており、五行目「踵應」は大半が残っており、近拓と比較すると摩滅が少ない（善本碑帖録）。

・旧拓→五行目「踵應」、六行目「垂」は完全、六行目「也摧」の二字の間は摩滅し、「也」の下、「摧」の上がつながっている（増補校碑随筆）。

・やや旧拓→五行目「踵」字の下の大半がある。十行目「刊」がみえる（増補校碑随筆）。

一行目「孝」字の上がわずかに摩滅している。五行目「踵應」の「踵」字の上半分が摩滅し、「應」字の「心」部分がない。十行目「刊」字左半分、「石」字の上部分がなくなっている（増補校碑随筆）。

・近拓→一行目「孝」字、五行目「踵」の大部分、十行目「刊石」の二字が摩滅しなくなっている（増補校碑随筆）。

これらの記述をもとに、比較表の①から⑪の拓本を考察していく。①北京最旧拓本は乾隆年間晩期もしくは嘉慶年間ものだと推察される。一行目「為孝文皇」、二行目「不」、五行目「龍」「遠踵應」が完全で、十行目「刊」字のはねが摩滅しているからである。②清雅堂一九四二④書跡名品叢刊⑨中国法書選⑥清雅堂一九七九年刊本はやや旧拓だと考えられる。⑤龍門造像題記⑧書学大系は近拓と推察される。⑦書学三九二号は①から⑥、⑧、⑨の拓と比較すると摩滅が甚だしく、一行目「孝文皇」、五行目「踵應」、十行目「刊石」が欠損していることから新拓と判断した。③書道名品体系については「遠」字等、字形が異なるように思われる。

五、結

四の考察をもとに⑪新潟大学蔵拓本を検証していく。⑪は比較表でみると全体的に摩滅が激しい。一行目の「為孝文皇」、五行目「踵」、六行目「垂」、「也摧」、十行目「刊石」は摩滅がひどく、もとの文字を確認することが困難である。⑩は一九九五年の拓であるが、一行目の「為」字が残っているのに対し、⑪は摩滅している。この拓本は一九七〇年頃購入されたのだから、矛盾が生じる。もう一点、疑問に感じることは、五行目の「遠」字である。①以外は「遠」の下と「踵」の上が摩滅し連なっているのだが、⑪は「遠」のしんにょうがくっきりとみえている。これらのことから、新潟大学蔵の拓本は翻刻であると考える。

図四　楊大眼造像記比較表（一枚目）

拓本の概要	① 龍門二十品 1995年 中教出版 北京最旧拓本	② 清雅堂 1942年 記載なし	③ 書道名品大系 書芸文化院 1955年	④ 書跡名品叢刊 1959年 二玄社 田近憲三 近藤秋篁蔵本	⑤ 龍門造像題記 中田勇次郎 1974年
一行目「為」「孝」「文」「皇」					
二行目「不」					
五行目「遠」「踵」「應」					

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥
新潟大学蔵拓本	龍門二十品 1995年 中教出版 1995年椎拓本	中国法書選 1988年 二玄社 個人蔵	書学大系 同朋舎 1984年	書学392号 1982年 日本書道教育学会 石橋鯉城蔵本	清雅堂 1979年 江川碧潭蔵本

図四　楊大眼造像記比較表

⑤ 龍門造像題記	④ 書跡名品叢刊	③ 書道名品大系	② 清雅堂 1942年	① 北京最旧拓本	拓本
					五行目「龍」
					六行目「垂」
					六行目「光」
					六行目「也」「摧」
					十行目「刊」「石」

⑪ 新潟大学蔵拓本	⑩ 1995年椎拓本	⑨ 中国法書選	⑧ 書学392号	⑦ 書学大系	⑥ 清雅堂 1979年

○参考文献

・春名好重他、『書道基本用語詞典』、中教出版
・中西慶爾、『中国書道辞典』、木耳社
・『中国碑刻紀行』、墨スペシャル一四、芸術新聞社
・『書道研究』一九八八・六、美術新聞社
・難波清邱、「龍門の造像」、『書学』三九二号、日本書道教育学会
・松井如流、「龍門造像記」、『書品』一七号、東洋書道協会
・劉景龍、『龍門二十品』、中教出版